



今日、クラスメイトのひとりがこの町を出る。
彼女の名はツバクロ。

「移り住む一族の子なんだよ、あたし」と、転校してきた
日に教えてくれたけれど……。

■ 「ずっと、ここにいてほしかったな」

美術室のドアを開けながら、わたしはつぶやいた。もし
ツバクロの耳に届いたら、責める言葉に聞こえたらうか。
だがツバクロは、もう窓に駆け寄っていた。黄ばんだカ
ーテンを引き開けると、古い手あかで曇った窓ガラスをシ
ャツの袖でゴシゴシ拭いた。

「カエデのいったとおりだ！ 町じゅうが見えるね！」
わたしには、まず灰色の空が見えた。

ツバクロのそばに歩み寄ると、隣の小さな校舎から小学
生たちが下校していくのも見えた。

美術室は、なぜか校舎の屋上の端っこに建っている。音
楽室や図書室を作ったあとで「美術室を忘れていた」と気
づき、しかたなくのせたみたいだ。

おかげで、「美術室の窓」がこの町でいちばん見晴らし
のいい場所になった。

最後にカエデの住む町を見たいなとツバクロがいったか
ら、わたしが提案したので。

「こっそり入ってみない？」って。

美術室は、埃の匂いがした。油っぽい匂いも感じた。
「湿った木の匂いもある」
と、ツバクロがくんくん、鼻を天井に向ける。